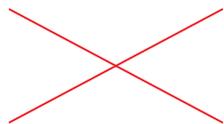


# ロックダウン世代で、 いいじゃん。

TALK  
EVENT  
REPORT

～コロナ禍で若者をノックアウトするな～

## 社会人 スペシャルトーク



## 大学生

新型コロナウイルスショックにより、大学生の未来はどう変わるのか？

「ロックダウン世代」※という言葉も生まれ、大学生は今までのようにキャンパスに通うこともできず、新入社員はいきなりリモートワークを経験するなど、将来にも不安を抱えています。もちろん、大学だけでなく、企業、家庭の様々なルールや仕組みも変化しています。本トークイベントでは、「ロックダウン世代」の若者が希望を持つにはどうすればいいのか？という問いについて、河崎環氏(コラムニスト)、税所篤快氏(社会起業家)、高橋晋平氏(おもちゃ開発者)、古田大輔氏(ジャーナリスト)という多彩な4名のゲストスピーカーを招いてポジティブな変化を議論し、建設的な提案を行いました。



※ロックダウン世代とは、新型コロナウイルスの影響で、教育や就職の機会、収入を失うなどの不利益を受ける可能性のある若い世代。国際労働機関(ILO)が報告書で使用した言葉。

EVENT  
OVERVIEW  
イベント概要

# ロックダウン世代で、 いいじゃん。

～コロナ禍で若者をノックアウトするな～

トーク  
テーマ

いま、自分が学生だったら何に取り組むか／コロナにより生まれた前向きな変化とは／働き方はどう変わるか？／就活はどう変わるか？／ロックダウン世代はかわいそうな世代なのか？／メディアは変わることができるか？／SDGsにどう取り組むか？／これからの時代を生き抜くためのポイントとは？

## SPEAKER PROFILE 登壇者プロフィール



河崎 環

ライター、コラムニスト

1973年京都生まれ神奈川育ち。慶應義塾大学総合政策学部卒。子育て、政治経済、時事、カルチャーなど多岐に渡る分野で記事・コラム連載執筆を続ける。欧州2カ国(スイス、英国)での暮らしを経て帰国後、Webメディア、新聞雑誌、企業オウンドメディア、政府広報誌など多数寄稿。2019年より立教大学社会学部兼任講師。社会人女子と中学生男子の母。著書に『女子の生き様は顔に出る』、『オタク中年女子のすすめ #40女よ大志を抱け』(いずれもプレジデント社)。



高橋 晋平

株式会社ウサギ代表取締役／おもちゃクリエイター

2004年株式会社バンダイに入社し、国内外累計335万個を発売し第1回日本おもちゃ大賞を受賞した「∞(むげん)プチプチ」をはじめ、50点以上のおもちゃの企画開発に携わる。2014年に独立し、株式会社ウサギを設立。最近開発に携わった商品は、遊ぶとイライラが減っていく「アンガーマネジメントゲーム」、遠隔で鳩を鳴かせて想いを届ける鳩時計「OQTA」など。全国での講演活動やオンラインセミナーなどでも幅広く活動中。

Twitterは  
<https://twitter.com/simpeiidea>



税所 篤快

国際教育支援NPO  
e-Education創業者

1989年生まれ、東京都足立区出身。早稲田大学教育学部卒業、英ロンドン大学教育研究所(IOE)準修士。19歳で失恋と1冊の本をきっかけにバングラデシュへ。同国初の映像教育であるe-Educationプロジェクトを立ち上げ、最貧の村から国内最高峰ダッカ大学に10年連続で合格者を輩出する。同モデルは米国・世界銀行のイノベーション・コンペティションで最優秀賞を受賞。五大陸ドラゴン桜を掲げ、14カ国で活動。未承認国家ソマリランドでは過激派青年の暗殺予告を受け、ロンドンへ亡命。現在、リクルートマーケティングパートナーズに勤務、スタディサプリに参画。同社では珍しい1年間の育児休業を取得した。著書に『前へ! 前へ! 前へ!』(木楽舎)、『最高の授業』を、世界の果てまで届けよう(飛鳥新社)、『突破力と無力』(日経BP)など多数。



古田 大輔

ジャーナリスト／  
メディアコラボ代表

福岡生まれ、早稲田大政経学部卒。2002年朝日新聞入社。社会部、アジア総局、シンガポール支局長などを経て帰国し、デジタル版編集を担当。2015年10月に退社し、BuzzFeed Japan創刊編集長に就任。ニュースからエンターテインメントまで、記事・動画・ソーシャルメディアなどを組み合わせて急成長し、国内有数のネットメディアに。2019年6月に独立し、株式会社メディアコラボを設立して代表取締役役に就任。2020年11月よりGoogle News Labティーチングフェロー。ジャーナリスト/メディアコンサルタントとして活動している。その他の主な役職として、インターネットメディア協会理事、ファクトチェック・イニシアティブ理事、Online News Association Japan オルガナイザー、早稲田大院政治学研究所非常勤講師など。共著に「フェイクと憎悪」など。

# 「コロナによって、自分を解き放つ」



## 河崎 環

ライター、コラムニスト

多数の連載を抱える上、フジテレビの「とくダネ!」でもコメンテーターを務めるコラムニストの河崎環さん。新型コロナウイルスショックで何が変化したのか。2児の母でもある彼女が、ロックダウン世代に期待することとは何か？

### 「人の視線」のために嘘をつくのはダサいと気づいた

—新型コロナウイルスショックにより、河崎さんはどのように変化しましたか？

**河崎環さん(以下、河崎):**ファッションとライフスタイルを大きく変えましたね。新型コロナウイルスショックの直前にフジテレビの「とくダネ!」に出演するようになり、テレビの画面上で自分を見るようになりました。それまで私、髪を伸ばしていたのですよ。そのほうが柔らかくて良い人そうに見えるかなって。でも、私の人生は、ほぼショートヘアだったんですね。それまで目をつぶっていた、似合っていない自分に驚くと同時に、思ったんです。人のためとか見栄えのためにウソをつく自分がダサいなって。そういうことがコロナで一切、嫌になりました。自粛期間中って、家に引きこもっているか、いっそ地上波のテレビに出るかの両極端しかなかったんです(笑)。人の意見を気にしたり流されることがなくなったから、自分に正直になろう、好き勝手にやろうと思いました。

—色々な自由を奪われているようで、むしろコロナで解き放たれたと。

**河崎:**仕事面でいうと、自分の書くものでも人の顔を伺うことをやめようと思いましたね。4月頃に安倍昭恵さんについて批判的な記事を書いたのですよ。それまでは「女性の味方」の私が女性を批判すると女性ファンが傷つくから止めよう、って思っていたんです。筆の力って剣よりも強いからひよっとしたら書かれた人は傷つくかもしれないけど、これは言わなくてはと思い、原稿を書きました。自分の中のストッパーが外れたんですね。ご本人から「お会いしたい」というメッセージが来ましたよ。結局、会わなかったんですけどね。緊急事態宣言のときも、自分と向き合う時間がやたらとあったので、いろんな感情や考えが研ぎ澄まされ洗練されていくところがあって、あれはあれで、すごく良い2、3か月だったんだと思います。むしろ感謝をしています。

—自分が今、大学2・3年生だったら何をしますか？

**河崎:**若い故に、コロナに対してフィジカルな恐怖を抱かないから好きだけ会いたい人に会いに行きますよね。色々な人の話を聞きに行くだろうし、ソーシャルディスタンスを保ちながら飲みに行き、立場や垣根をこえて話していると思います。大学生であるという、自由な時間を全力でエンジョイすると思いますよ。

—コロナの前も10年刻みくらいで大きな転換が来ていますね。

**河崎:**先日、Abema TVの有名プロデューサーさんと恋愛リアリティショーについて話したんです。こういう番組自体は1999年の「あいのり」から続いていますよね。そこから、「テラハ(テラスハウス)」に変わる頃はSNSへのシフトが起こりました。SNSを巻き込んだ展開に番組が変わっていったと。常識なんていくらでも変わるんだ、って思いますよね。今回のコロナでも価値観軸みたいなものも変わってくるから、例えば「かつこいい」という評価の基準も変わってくるので、女の子の世界とかもリセットされてきて、男子にうけるようなメイクとかではなくみんな好きな格好するんだろうなと思いますね。わかりやすい意味でも、「かつこいい」が変わるんだろうなと。

—最近の関心事は何ですか？

**河崎:**今年の5月にすべてのウェブメディアが過去最高のPV数を叩き出していましたよね。その後、ウェブメディアから離れた人が、今、何をスマホで見ているのかが気になります。可処分時間がウェブメディアなどの早く不安を払拭してくれる情報を流すところに一旦、固まった後、また広がりましたよね。その経緯で、今、何に広がっているかを見ていくことは、アフターコロナの流れを見ることにおいて重要ですね。

### デジタル・ネイティブ世代の逆襲に期待

—これから起こるポジティブな変化にはどんなことがありそうですか？

**河崎:**デジタル・ネイティブ世代が起こしていく逆襲に期待しています。逆襲は意図的ではなく、上の世代よりも圧倒的に高いスキルを持った世代の人が技術的に上の世代を駆逐していくのだろうと感じますね。彼らは、情報量が昔とは違うため、勉強量も増えています。

今どきの高校生バンドが上手いという現象にも世代、時代の違いを見ることができます。世界の最高のプレイをYouTubeでチェックできますし、いい機材を昔よりも安価に手に入れることができますし、技術が高いと感じますね。その環境に育った人に勝てるわけがないと思います。

最近のEDMの世界では、キーボードやギターなどの楽器を弾けなくても、MIDIパッドで入力し、音を作れるじゃないですか。ピアノの音階を知らなくても、弾けなくても、音楽が奏でられて、なおかつ、かつこいいものも作られてしまうことに驚きました。こういうことも含めて、デジタル・ネイティブ世代に勝てないという感覚に陥りましたね。

—最後に今回のトークイベントにける意気込みを

**河崎:**様々な立場の人達が集まって、アフターコロナについて見解をすり合わせ、現時点での個々人の「暫定解」を見る事ができる、価値あるイベントだと思いました。どうぞよろしくおねがいします。

# 「社会と繋がることが健康の第一条件」



## 高橋 晋平

株式会社ウサギ代表取締役／  
おもちゃクリエイター

株式会社ウサギ代表取締役  
おもちゃクリエイターの高橋晋平  
さん。2004年株式会社バンダイに  
入社し、国内外累計335万個を発売  
し第1回日本おもちゃ大賞を受賞し  
た「∞(むげん)プチプチ」をはじめ、  
50点以上のおもちゃの企画開発に  
携わってきた。2014年に独立し、株  
式会社ウサギを設立。最近も、遊ぶ  
とイライラが減っていく「アンガ  
ーマネジメントゲーム」、遠隔で鳩を鳴  
かせて想いを届ける鳩時計  
「OQTA」などの開発に携わり、オン  
ラインセミナーなども精力的に行っ  
ている。新型コロナウイルスショッ  
クで変化したこと、これからの生き  
方、働き方について話を伺った。

## 社会と繋がることが健康の第一条件

—新型コロナウイルスショックで、高橋晋平さんの生活、お仕事はどのように変わりましたか？

高橋晋平(以下、高橋):「社会と繋がることが健康の第一条件である」ということに気づきました。当初予定されていた仕事がなくなり、不安な日々を送りましたが、その後、公私ともにポジティブな変化が起きました。

プライベートでの大きな変化は、ずっと疎遠だった秋田の実家の両親とオンラインビデオ通話をするようになったことです。パソコンをプレゼントしました。離れていても、繋がるという尊さを感じました。両親との関係を良くしたいとずっと思っていたので、これは大きな変化でした。

仕事面では、「オン飲み(オンライン飲み会)」など「オンライン」という用語が流行り始めたときに、「最速でZoomで遊べるアナログ玩具をつくりだす」ということにこだわり、オンライン専用カードゲームを発売しました。自分が登壇するセミナーも、オンラインなので全国から参加していただけるようになりました。

アイデア会議を行うときも、オンライン会議でGoogleの匿名スプレッドシートを使うようになったところ、リアルな場では普段発言の少ない人がアイデアを出すようになったことも大きな変化ですね。

これまでは、発言者が明確になるリアルな場での会議を推奨していましたが、オンラインの方がむしろアイデアが出やすくなる場合があることは大きな発見でした。

—良いことだらけに聞こえますけど、逆にマイナス面などはなかったのですか？

高橋:オンラインで講義することに慣れるまでは「無観客ライブ」状態に戸惑いました。リアルな場ではジョークを挟んだりすると、参加者から反応があります。そのような対話型だと、緊張せずに講座を進められますが、オンライン上では参加者の顔が必ず見えるわけではないし、音声ミュートされているので、お客さんの反応がわからず、焦ることがよくありました。

ネット空間が殺伐としていることにも問題意識をもっています。オンラインが中心の生活になったことにより、ネット民のストレス発散の機会がオンライン上でしか得られなくなりました。このことにより批判がオンラインに殺到しました。誹謗中傷問題にも、このご時世が一部影響しているのかもしれない。自分が何かを発言したことにより批判を受けると怖くなってしまいます。YouTubeなどは、低評価ボタンがあるだけでも恐怖を感じてしまいます。よく言われる「断断」を感じることもありました。

## 心地良い方法で社会と繋がる

—どのようにして、乗り越えましたか？

高橋:大事な点は「心地良い方法で社会と繋がる」ということです。プラットフォーム上での人と繋がりを考え、オープンな場よりもクローズな場で繋がれることを意識しました。大規模ではなく、小規模で、「スモールビジネス」に重点を置き、IT企業と連携して「妄想商品マーケット MouMa」を開発しました。一般的に、IT業界ではプラットフォームを大きくし、多くのユーザーのログを活かした、いわゆるビッグデータ活用がすすめられてきました。しかし、リアル空間に逃げ場がなくなりオンライン前提になった今、大きな枠組みの中ではなくとも、同じ趣味趣向を持つ人だけが集まることによって、心地良い空間を保つことができます。

このスモールビジネス「妄想商品マーケット MouMa」の利点は、巨額の費用を費やさずとも、小さい枠組みの中で語れる材料を吸収・編集し、参加者が投稿した内容をPodcastや記事、リアルイベントなどのコンテンツにすることによって1つのエンターテインメントとして収益にすることが可能であることです。運営側とユーザー側、全員でそれらを楽しむことで、交流が広がっていきます。

—あえて、オープンではなく、クローズドな、小規模な世界にいくと。

高橋:会社員時代に体調を崩して寝たきり状態になったことがありました。しかし、仕事をしていな

いと自分を保つことが困難なので、その時ひらめいたアイデアをボイスレコーダーで録音していました。当時、SNSがもっと普及していたら、録音したアイデアを誰かに聞いてもらって、少しでも気が楽になったでしょうね。

今は、あえて大勢に知られないようにしバランスの取れた心地良い方法で社会と繋がることが、現在のオンライン空間を過ごすためのポイントだと思っています。

—今後の社会ではどのような変化が起こると思いますか？

高橋:人類が新型コロナウイルスを乗り越えた、その先を見据えた仕込みですね。ワクチンが普及し、新型コロナウイルスがインフルエンザぐらいの位置づけになったとき、人に会うことができる喜びの感情が生まれて、リアル空間での需要が高まると予想しています。そのときに向けたアイデアを今から練っておくことですね。

近い未来に出現する新しいリアル空間に対応していくためにも「社会と繋がることが健康の第一条件」ということを念頭に置き、心地良いと思う範囲で社会と繋がれ、新たな事業形態を考えることが明るい未来を築くことになるのではないのでしょうか。イベントで、皆さんと語り合えることを楽しみにしております。

# 「日本国内の、地方の魅力に注目する」



## 税所 篤快

国際教育支援NPO  
e-Education創業者

学生時代から国内外の興味のある場所に飛び込み活動していた社会起業家税所篤快さんは、海外への渡航が困難となった今、日本国内の地方に注目している。新型コロナウイルスショックによる彼の変化とは？

### コロナで増えた近所付き合い

—新型コロナウイルスショックによるご自身の変化について教えてください。

**税所篤快(以下、税所):**近所の友達付き合いが増えました。いま、住んでいるエリアには友達が多数住んでいるのです。本やDVDを貸し借りしたり、近場の友達との仲がとても良くなって、前よりも付き合いが深くなった感じがしましたね。個人的にも幸福度は上がりました。

—なるほど、コロナによって人間関係がまるで少年時代に戻ったような感じなのですね。

**税所:**自転車で行ける距離の人達との関係があると、落ち着きます。少年時代を、色々思い出しましたね。出歩くことが困難であるがゆえに、近くの人と密になりました。

—税所さんは学生時代に、思い立ったらすぐ行動して、地方の大学の先生に突然、アポをとつ

て駆けつけたり、バングラデシュに飛び込んだり。社会起業家として活躍して、学生時代に書籍もリリースしましたね。そんな税所さんが、いま、学生だったら何をしますか？

**税所:**もし、学生なら今は海外に行きづらいから国内の地方で面白いプロジェクトや事業を起こしている人を探して、「何か出来ることはないか」と聞きに行く感じですね。学生時代の時から変わらないうえ、事業やプロジェクトを起こしている彼ら彼女たちがどんな顔でどんな考えで取り組んでいるのか。その雰囲気は、現場でしか分からないですよ。具体的には、高知県神山町で今、新しい学校作りの話があるのですね。谷全体が学校で、町全体で学校と町の境界線もなく学びの場を作ろうというプロジェクトが始まっていて、今とても惹かれますね。

### どこで子供を育てるのか？従来の枠組みを超えて考える

—最近の関心事は何ですか？

**税所:**これから5年・10年どこで子育てをしたら面白いのかに関心があります。今は家族と様々な場所に出かけています。もし、出かけた場所に住んだ時にどのような面白い体験ができるのだろうという観点で考えています。

長野県の本島平の村で移住体験住宅というものがある、そこで先月、家族と約1週間、生活しました。学生が町おこし・村おこしを行っている噂を聞きました。行った友人たちがすすめていたので、行ってみたいと思ったのがきっかけですね。村に行って、田んぼに囲まれている家に1泊3000円で宿泊できました。住む場所も素晴らしく、家の前には家庭農園ができており、そこでトマトを収穫しました。2歳の息子がトマトの成り方を初めて知り、宿泊した1週間、収穫を楽しみ、トマトを食べ続けましたね。

このような体験は東京で行うのは難しいです。このような暮らしに憧れを持っていて実際はどうなのかに興味があって、地域にいる友人を訪ね歩いています。

—税所さんや、友人の皆さんが「面白い」と思う基準は何ですか？

**税所:**面白いと感じる基準は「地元の人」ですね。部外者や若者が来ても懐が深く、新しいことを始めることに魅力を感じ、器が大きい人がいると思います。お金とは違う価値があると、行った人が言っていて、暮らしの満足感、充実感がお金に引けをとらないものがあると考えますね。

—地域に行く時に、その町の魅力を引き出す行動などはありますか？

**税所:**現状だと現地に行って表立って何かを出来ないから次の旅で見つけようとする感じですが、

まず何かするには信頼する人と繋がるのが大事で、その人と話して何か見つけられないかなと思っています。

—これから起きるポジティブな変化があるとしたら何でしょうか？

**税所:**6月に本を出版したんですけど、いまは本が売れない現実があるじゃないですか。近所の友人と連携し、Zoom出版イベントを積極的に仕掛けてみました。従来、書店にお願いし、人を集めることが大変だったのが、Zoomの活用で出版イベントがシンプルに多くの人に関わりをもってもらい、やり遂げることができました。書店で行うよりも、Amazonなどですぐ買ってもらうことができました。近所に友人がいることで、イベントなどの企画、取り組みを早くできました。そして、これから持っていることを活用し近くの友人と共有し、拡散してもらうことで、ベストセラーとまでは行かないものの届けたい人に届けることができ、骨のある作品ができるようになることを期待しています。確実に売れて、面白く、感度がある人に届く本の流通ができることを期待しています。

—この講演会にかける意気込みを。

**税所:**登壇者同志の化学反応で何かが起こる気がします。よろしくおねがいします。

# 「できないことより、できることを考える」



## 古田 大輔

ジャーナリスト/メディアコラボ代表

朝日新聞を経て、BuzzFeed Japanの編集長として活躍し、20年11月からGoogle News Lab Teaching Fellowに就任したジャーナリストの古田大輔さん。新型コロナウイルスショックによる自身と社会の変化についてお話を伺った。今回、古田さんのインタビューで最も印象的だったことは「できないことより、できることを」という言葉である。古田さんは「人と会うこと」が職業であったため、コロナウイルス感染拡大で会食がなくなったことにより、人と会う機会が減少してしまったとのことだった。しかし、自宅で過ごす時間が増えたことをポジティブに捉え、心地良い空間作りを心掛け、クオリティ・オブ・ライフも向上させた。コロナ禍の中、ロックダウン世代の若者に何ができるのか？ヒントはここに。

## ニュースの摂取量を増やす

—コロナ禍による、若者にとってのポジティブな変化があるとしたら何がありますか？

**古田:**若者だけでなく、社会全体でコロナのダメージは非常に大きいです。家庭の収入が落ちている上にアルバイトもできず、進学ができない、退学せざるをえないという話すらあります。

その中でポジティブな変化を見つければ、オンラインでのコミュニケーションでできることが増えたこと。そして逆にオンラインが一般的になったからこそ、改めてオフラインの良さに気づくことができることでは。これは若者に限りませんが、

—オンラインでのコミュニケーションが増えることで気をつけるべきことは？

**古田:**現代はソーシャルメディアが普及し、簡単に情報収集ができ、学びの機会がたくさんあるという恵まれた環境が、若者に与えられています。一方で、今の学生達は政治や社会に関連するニュース(ハードニュース)への接触時間が減っていると僕は感じます。

20世紀は情報量が少なく、新聞やテレビなどのマスメディアが情報発信をし、影響力を持っていました。しかし、スマートフォンとソーシャルメディアの普及によって情報をいつでも受発信できる時代が到来しました。ここで問題となってくるのがいわゆる「フェイクニュース」です。誰でも情報発信ができるようになり、情報の質の担保は難しくなりました。

様々な分野の専門家が情報発信をすることは素晴らしいですが、専門家ですらいつも正しい情報を発信しているとは限りません。

例えば、コロナをめぐって多くの医者が情報発信をしていますが、中には他の専門家から見て、信頼性にかける発言をする人もいます。

学生がニュースと接するのが1日10分間程度だとすると、それだけの情報で信頼できる情報を得ること、どれが信頼できる情報だと判断する力をつけることは可能でしょうか。

たとえば、日本経済新聞は1日に300件以上のニュースを発信しています。大切なニュースであるからこそ発信しているのです。300件すべてを見るのは難しいですが、少なくとも10分しかニュースを見ていないとしたら、世の中の動きの本当にごく一部しか知ることができていないということをまずは知っておく必要があるでしょう。

勿論、課題やアルバイトがあり、ハードニュースを読む時間を確保することは難しいかもしれません。大切なのは「日々の積み重ね」です。学生の皆さんには、情報を簡単に手に入れられるようになった環境を活用し、根拠がはっきりしない噂話ではなく、発信源の身元がわかる信頼性がより高い情報や、ファクトチェック(事実の検証)がされている情報を幅広く摂取しましょう。

## 学生は何でもできる

—コロナ禍で古田さんが学生だったら何をしていましたか？

**古田:**大学生活を4年間と考えたら、コロナの直接的な影響があるのはたったの4分の1程度です。コロナにだけ標準を合わせて活動をしなくてもいいんじゃないかと思えます。

同時に考えるのは、コロナでオフラインの活動は減ったけれど、その分、オンラインで活動する時間をより多く確保できるようになったということです。私は「できないことより、できること」を考えるので、インターネットをフル活用するだろうと思います。情報の受信でも、発信でも。

世界的には3月の時点で、インターネットで人々がニュースサイトを見る件数が倍近く増えました。みんなが信頼できる情報を求めている。僕が学生だったら、このタイミングで何らかの情報発信を始めていたんじゃないかなと思います。そういう団体のインターンをするのもいいでしょう。

ニュースメディア関係の仕事に就きたいと言っている学生の相談を受けることがあります。このような相談を受けた場合、必ずその学生たちに「では今、何を書いているの」と質問をします。するとたいてい「何も書いていない」という返答が来るんです。「今では情報発信するツールは山ほどあるんだから、書きたいなら書けばいいじゃん」って思いますよね。—確かに意外と情報発信をしている学生は少ないと思います。

日本では個人でnoteに書いていたり、You TubeやTikTokで情報発信をしていたりする学生はいますが、海外に比べてニュース的文脈での情報発信をしている学生はものすごく少ないと思います。

—古田さんが学生だったらどのようなテーマを書きますか？

「政治」について書きます。ジェネレーションZと言われる今の世代の学生たちは世界的に見れば政治への関心が高いです。例えば香港や台湾、タイでも政治に関するデモが起こっています。

これら3つの国では「ミルクティーアライアンス(同盟)」という連帯が存在します。例えば、タイでは今、学生たちが自分達のデモを「香港スタイル」と呼んでいます。SNSやメッセージを使って、デモの集場所など連絡を取り合い、デザイン性に優れた画像や動画を使って自分たちの思いを表現する。Twitterのトレンドがデモに関する発信で埋め尽くされることもある。

このようなことが日本にないことが不思議であると同時に、自分自身メディアの仕事についているので、若者の政治的な関心を高める情報発信ができていなかったと痛感しています。BuzzFeed Japanの編集長時代にはそれに取り組み、将来的には自分で若者たちにもきちんと伝わるニュースメディアを作りたと思っています。

—最後に、このイベントを通じてロックダウン世代に伝えたいことを教えてください。

時間を大切にしてほしいと思います。大人はお金があるけど時間がない。僕は大学の4年間と卒業後の1年間、あわせて5年間は、ひたすら、興味の赴くままに本を読んだり、行ってみたい場所に行ってみたり、振り返ると本当に幸せでした。時間だけではありませんから。

同時に今は経済状況が厳しくなり、そんな余裕はないという学生が増えています。苦しい人はまずは色んな奨学金を探してほしい。そして、学生を助けたい大人は沢山いるから、学生の特権を生かして声をかけてほしいと思います。

2020年11月11日(水)にオンライン開催されたトークイベント「ロックダウン世代でいいじゃん!」の様をダイジェスト版でお届けする。4人の論者と司会、学生により白熱した議論が展開された。



## ロックダウン世代の学生について思うこと

**常見陽平(以下、常見):**新型コロナウイルスショックが世界に影響を与えています。若者にも多大なる影響があり、「ロックダウン世代」という言葉も世界的に広がりを見せています。日本においても、大学生やその保護者による学費返還運動や、対面講義再開を求める声がありました。文部科学省でも、対面講義の実施状況を調査し、発表するという動きがあります。

**河崎環(以下、河崎):**私は今日、このイベントの前に立教大学で講義をしてきました。もともと、ゼミ形式でマックス24人程度の小さな規模なのです。立教大学はオンラインオンリーだった春学期の方針を改め、秋学期からゼミなどは対面講義を取り入れることにしました。さて、私の講義の履修者は何人だったでしょう？

**高橋晋平(以下、高橋):**200人ですかね？

**河崎:**履修登録数、5人です。

**一同:**えええ!!

**常見:**フジテレビ系「とくダネ!」に出演している、売れっ子コラムニストの河崎さんが講義をするのに、5人!

**河崎:**いえ私なんてそんないいものじゃないですけど、びっくりしましたよ。元々、ゼミ形式だけ

ら少ないのは覚悟していました。でもね、世の中ほら、いつまでもオンライン講義やってるんだ、それで授業料一緒だなんておかしいんじゃないかと、「学生よ、キャンパスに戻れ!」みたいなことをみんなネットで言ってたじゃないですか、夏休み。さぞかし学生がいっぱい来ると思ったら、キャンパスのある池袋はガラガラですよ。私、このままだったらクビになっちゃうんじゃないかってあまりにも不安で、大学に聞いたんです。「履修者たった5人だったんですけど」と言ったら「演習タイプの講義の中で今回16講座が対面授業を表明しました。なんと半数以上が履修者0で開講できませんでした。辛うじて開講できた科目も全て一桁です。むしろ、開講できてよかったぐらいに思ってください」と言われたんです。

**常見:**どうしてなんですかね？

**河崎:**履修科目を決める9月末の時点で、学生たちは周りを見たんだろうと思います。大学が全部オンラインに振れているわけでも、対面に振れているわけでもなかったの、どっちがより自分に有利か、より自由度が高いか、彼らなりに均衡点を探ったのではないかなと思う

のです。私の授業を5人が履修していますが、実際に来ているのは4人しかいません。全員女子学生なのです。将来、メディア関連の仕事をしたという。履修した理由を聞くと、「とにかく学校に行ける科目の一つは受けたかった。学校に行きたかった。外に出たかった。」と言っていました。女子に関しては、コロナに対する恐怖感などは自分たちなりの解決ができていのではないかなと。彼女たちは、自分でどう動くかを決めたのですよね。

**常見:**学生たちにアンケートをとったんですけど、コロナが収束したあと、どのような講義形式が望ましいかという問いに対して、コロナ後もオンライン講義オンリーと答えた人は0%だったんですね。

一方で、対面講義中心にしてほしいと言っている人が、30%強です。コロナ後もオンラインと対面を使い分けるか、両方参加する講義スタイルを求めています。対面オンリーを希望しているわけでもないのです。教育関連で社会起業を経験している税所さんは、今の大学、大学生をどう見えていますか？



**税所篤快(以下、税所)**:いま、留学や海外旅行ができない状態になっていて、気の毒なのですが、一方で若者たちは次のアクションを始められていますよね。最近、家族で四国の山奥を訪れたのですが、その時に出会った大学生はオーストラリアに留学する予定だったのですが、それが駄目になって。その代わりに、コーヒーが好きなので、これから後期に休学して豆を焙煎するビジネスを準備しています。その豆を買って飲んだのですが、凄く美味しかったです。やっぱり、動いている人たちは変わらずに動きを止めていません。起業をはじめ、何かに向かって準備をしている。

**常見**:大学生の動きが逆に見えなくなった感じがします。例えばSNS投稿でも、人と会ったり、一緒に食事をしたことを投稿しなくなっていますよね。「自粛警察」的なものも話題になっていますが、活発な学生、もう古い言葉ですけど「リア充学生」の「地下化」、つまり自分の行動をSNSに投稿しなくなっているようにも感じます。

**税所**:それはあると思います。僕が住んでいる家の裏に、大学生たちがやっているスペース、通称「軍事施設」というものがあり、そこでは活発に地元の大学生が集まって、作戦会議をしているんですよ。ただ、それは公にするとというよりは、しつぱりとそこでやっている。僕たちの世代が社会起業などに取り組んだ頃と比べると、発信に気を使っているなど感じますね。

**常見**:ロックダウン世代の学生を見て、古田さんが感じたことをお聞かせ頂きたいのですが。

**古田大輔(以下、古田)**:僕は、FIJ(ファクトチェック・イニシアティブ)という団体の理事をやっている、そこに学生たちがインターンとして参加しています。リサーチャーと呼んでいるのですが、ファクトチェックのためのファクトやデータの下調べをする役割を担ってもらっています。ジャーナリズムに関して学生の前で講演・講義をすることもあります。今の学生は本当に優秀な人が多いし、真面目ですよ。質問も熱心で、時間がオーバーするくらいです。僕は1997年に早稲田大学に入学し、2001年に卒業しました。いわゆる「ロストジェネレーション世代」です。就職氷河期で、就職にも凄く苦勞

していた世代です。僕らが学生のときに、今の学生ほど勉強していたかという、全然そういうことなく、まだまだ単位が楽勝ととれる時代でした。危機感はあったものの、「なんとなく不安だね」という感じで、そのまま就職活動に突入する人たちが多かったと感じます。それに比べれば、今の学生たちは凄く真面目に頑張っていると思います。今は新型コロナウイルスの影響で、学生だけでなく、社会人もみんな大変な想いをしています。学生たちの中では、家族の収入がかなり落ち込んでいるとか、本人もそれでアルバイトで学費を稼いでいたのに、それもできなくなって、辞めざるをえない。それくらい追い込まれている人もいますので、我々大人としては、ひたすらあたたかく見守り、サポートしていくしかないと思います。

**常見**:大学生像をアップデートしないとイケないですよ。現在の学生像と、上の世代が語る学生像がそもそもズレている、コロナ禍における大学生生活に関する議論もかみ合わないことがあります。また、菅首相が「自助・共助・公助」といって、野党やメディアから批判されました。自分たちだけでなく、みんなで助け合わなくてはなりません。

**古田**:共助・公助もですが、「自助」も僕は大切だと思います。僕自身、「ロストジェネレーション世代」ですが、当時はこの言葉はなく、2007年に朝日新聞が就職氷河期世代のことを「ロストジェネレーション世代」、略して「ロスジェネ」と名付け、特集を組んだんです。既に朝日新聞にいましたけど、「何がロストだよ」と「俺は何も失ってねえぞ」と思って、非常に腹が立ったんですよ。厳しい環境においては、もちろん周りの人間としてサポートしてあげたいって僕は思うし、共助したいなと思うんですよ。ただ、一方で自分は自分で「助けなんていらない」ぐらいの気持ちでないと、かなり厳しいんじゃないかという気がします。同時に、本当に困った時にはすぐに助けを求めて欲しいし、支援の手が届く。両方大切だと思います。

**常見**:高橋さんはどうでしょう？

**高橋**:今の学生は優秀で、器用だと思います。オンラインでもあつという間に交流を広げたり、人と話すことができるのが素晴らしい、自分

では考えられないことです。というのも、自分は18歳までは秋田にいて、すごくコミュ障でした。その後、大学進学で仙台に行き、当時は大学デビューをしたいと思っていました。そこでお笑いをしたくて、落語研究会に入ってモチようとしていたんですよ。これをきっかけに、その後、社会人になってコミュ障が改善された。現代にも当時の僕のような若者がいると思います。そういう人にとってはこのような状況はきついです。やっぱり上京してきて大学の仲間に巻き込まれて、楽しいことから始まると思うんですよ。だから、自分から動けない人にとっては、今はきつい状況だと思いますね。

**常見**:確かに大学は偶発的な出会いが生まれる場でもありますね。高橋さん、逆にコミュニケーションが苦手な人にとってハッピーな時代になっていると思いませんか？

**高橋**:僕が今の時代に放り込まれたら、なんとなく心地よく感じて、家でものづくりを楽しんでいたと思います。どんな大人になったかは分かりませんが、その時代に対応はしたと思います。常見先生がおっしゃったような偶発的な出会いは、今はネットでも可能です。今まで足の踏み入れたことのない世界にも入り込むことができると思います。でも、ネットでのうろつき方がわからない人もいると思いますね。

**常見**:本学2年生の佐々木さんは、当事者としてどのように生活が変化しましたか？

**佐々木陽菜(以下、佐々木)**:心身ともにオンラインに浸食されたと思います。現在は週2回対面講義があります。対面だと友達に会えるし、先生とも話せるからいいのですが、講義が再開した頃は久しぶりだったので疲労感がありました。私たち国際教養学部の2年生は本来留学に行くはずでしたが、コロナの影響で行けなくなってしまいました。その間を埋めるために3年生の講義を履修できるようになりました。しかし、やはり内容は難しく課題を終わらせるのに夜中までかかってしまうことがよくあり、生活リズムが乱れてしまいました。一方で、交通費が浮いたので経済的に助かったという面もあります。



# 正しい情報とは何だろうか？



**佐々木:** コロナ禍で、SNS上では様々な情報が飛び交っています。最近では、大統領選関連でメディアの偏向報道について興味があります。以前、ニュースを見ていた時にバイデン氏の紹介の時はヒーローのようなBGMが流れる一方、トランプ氏の紹介では悪役のような登場の仕方でした。これは偏っていませんか？

**常見:** 古田さん、「偏向報道が多いのでは？」という佐々木さんの考えについてどう思いますか？

**古田:** よい視点だと思いますが、そもそも、報道とは何だろうかということから考えなければなりません。僕がシンガポールにいた時の話です。シンガポールには政府系のバックアップを受けている新聞があります。その新聞では伝統的に与党の候補の写真が大きかったのですが、ここ数年でやっと与党と野党の写真が同じくらいのサイズになりました。以前の状態は明らかに中立だとは言えないですね。

今回の大統領選においてアメリカの報道機関がファクトチェックに取り組んでいました。トランプさんは過去の政治家では考えられないほど大量の嘘の発言をしていたことがわかりました。ここでバイデンさんとトランプさんを比べてみましょう。もちろん、バイデンさんも発言がすべて正確とは限りません。では、ここでメディアが公平を期するために、バイデンさん、トランプさんの正確ではない発言を5つずつ紹介するとします。これは公平と言えるのでしょうか。僕は違うと思います。もし、バイデンさんが5つ、正確ではない発言をしていて、トランプさんがその10倍の数の嘘をついていたら、嘘の発言の数はバイデンさんが5で、トランプさんが50だったと報道するのが、客観的で正しいと思います。でも、このような背景を知らなければ、なぜトランプさんの方が嘘の数が多いかのよう報道されるのかと思えてしまいますよね。だから、その報道が偏向報道かどうかを見極めるには、まず自分に知識が必要です。これは非常に難しいことです。すべての報道において、視聴者側に深く広い知識を求めるのは不可能に近いです。どうしたらバックグラウンドや、コンテキストを含めて報道できるのかということが今、議論されているんです。一方で、本当に偏向している報道もあるんですよ。これもまた問題です。「本当に偏向している報道」と、偏向しているわけではないけれどBGMなどの演出で「偏向しているように見える」報道がある。これを分けて考え

なければ議論が無茶苦茶になります。

今朝、ツイートしたのですが、アメリカのローカル紙が発達障害についての連載を始めたんですね。この記事を書いている女性記者は自身にダウン症の娘さんがいることを書きました。障害がある子を持つ記者が書いている記事は、バイアスがかかり、偏向して報道しているのではないかと不安に思う読者がいたらいいんです。そのローカル紙はそれに関して説明をする記事を出しました。

なぜ我々はこの企画に取り組むのか。最後の文章が感動的でした。この企画が始まったのは、この女性記者がこの問題に興味があるからだ。なぜならこの記事は彼女の家族に関する話であるから。我々はそのことによって彼女の記事が不公平になることは考えられない。むしろ彼女の関心がこの問題をよりよい方向に向かわせるだろうと、ちゃんと説明している。彼女の記事が偏向しているかという、むしろ素晴らしい記事であると思います。そういうところまで考えて「偏向」とは何かと考え自身で定義づけられないとそもそも偏向報道を議論することはできないと思います。

**河崎:** 今、ふと思いついたのが、緊急事態宣言が発令された際にすごく売れていた本が日経BP社から出ていた『ファクトフルネス』なんですね。もともと、ヒットしていましたが、もう一回売れたんですよ。私、書評を書いたりもするんですが、二年ほど前にも品切れになったものが新刊書棚にワツと出ていて「あれ？」って。電車の車内貼り広告に載るくらいもう一度売り上げを伸ばし、他社の経済雑誌がもう一回、特集を組んだりして。でもその取り上げられ方には独特の癖があった。大丈夫、心配なくていい、今、世の中で怖い怖いとみんなを煽っていることは偏向報道であると。もともと人間は悲観的な思考をする癖があるから、今、世の中で懸念されているものは彼らの脳の癖によって委ねられているものだ、信じなくていい、大丈夫だみたいな単純化を雑誌上ではされるわけですよ。ただ、この本で取り上げているファクト自体の正しさも問われています。ですから、一種のカルチャー本というか、自己啓発本みたいな雰囲気の上延上にこの本はあった。結論があるとすれば、ファクトは一つではなくて、それを唱えている人にとってはファクトなのかもしれない。客観的視点だって様々な角度がありますし、人間も社会も三次元の奥行きがあるわけじゃないですか。

誰ならそのファクトを「正しい」と判断できるのか。

**古田:**ファクトチェック関連の団体の理事をしていますし、関連したイベントにも登壇しておりますが、おっしゃる通り、昔から難しいんですよ。何を事実とするのか。新聞に載る情報でいうと、いまの天気予報は、極めて精度が高い、正確なものを出せるんですよね。絶対、間違えないもので言うと昨日、終わった野球の試合結果がそうです。「昨日の、巨人対広島は、巨人が勝ちました」などがそうですね。厳然たるファクトです。ただ、様々な方向から見たら、見え方が変わるファクトってそれはそれであるのですよね。例えば、「トランプさんは悪人です」みたいなものです。それファクトですか？いやいや、100%非の打ちどころがない悪人なんてこの世にいないからとか、トランプさんだって良いことやってたって言えるという所はあるのですよ。100%客観的に正しいものと、見え方によって判断が分かれるものを切り分ける必要があります。

**河崎:**政治的な問題も2016年にトランプが大統領になって以降、特にメディアにおけるファクトって何だろうという所に、意識が行った気がするんですね。今回のコロナ報道

でも報道の正確さなんてものは大分メディアも自覚的にやっていた気がするんですよ。読む側もどのメディアを情報摂取の対象とすることで、自分たちなりのバランスをとっていたような気がするんですね。あえて偏向の方を選ぶ人も中にはいると思います。でもそれを恐らく学生はちゃんと理解して、肌感覚として理解できていたんだろうなと感じるんです。大人たちはファクトか否かを理屈で判断しようとするんですけど、別に自分がメディアを選ぶ時に何が信頼できそうか嗅ぎ分ける嗅覚とか、ほかの人たちはこの人を批判するけど私はこの人に対して共感するみたいな自分軸を持っているわけじゃないですか。だから佐々木さんだって私はトランプ派ですと主張することが出来るわけですよ、たぶん周りから色々言われると思いますけれども。私たちの時代って割と正解が一つだったんですよ。ものすごい受験世代なんて一番人口が多い世代。だから今の学生を見ると、正解がないってことをこの子たちはやっているんだな、それは自由だなという風に私なんかは思う。正解からの自由。もちろんそこには責任が伴いますけれども、それをこの子たちは手に入れた気がします。それが良い変化。

**常見:**正しいってことは何なのかっていうことで、それは、正確なのか正義なのかっていうことであって、特に報道の場合は正確のことを正しいというはずなのに、いつの間にか書き手も受け手も正義の話をしてないかという所ってあるじゃないですか。何が正しいのか、それをちゃんと判断できる記事だとか文脈だとか教養だとか、そういうようなインプットが非常に大事だなと思いました。

**税所:**大学生の時に、バングラデシュのグラミン銀行がすごく成果を上げているということで、とにかく華々しい成果が本にたくさん書いてありました。「たくさんの女性たちを救った」、「現地でいろんなインパクトを起こしている」という報道を日本で見て、大学の友人たちとバングラデシュを訪ねて村人に話を聞くと、「借金がかさんで夜逃げせざるを得なくなった村人もいる」ということだったりして。現地に行くと話を聞かないとわからないんだという経験をしました。何が正しいかを見極めるためには出来るだけ現地に行くと話を聞くことがいいたろうと思う一方で、今は海外に行きづらいから、その辺はどうなのかなっていうことを、佐々木さん世代は考えているだろうなと思います。

## 良い変化の兆しもあるのでは？



**常見:**今、若者にとって良い変化があるとしたら何ですか？

**税所:**さきほど古田さんが、「昔の人の本も面白い」っておっしゃったじゃないですか。僕は、今、現役で生きている人の本を読んで「これは面白い！」と思ったら、会いに行くことをある種の日課みたいにしてます。大学生くらいの時に始めたことですが、今の時代だからこそ会いやすいのではないかと。極端な話、アメリカやイギリ



スにいる著者に会いに行くのは難しいのですが、Zoomだったら結構簡単に繋がれるし、著者も佐々木さんのような若い世代に読んでほしいと思っているから、30人くらい友達を集めてZoomで招待すれば、喜んで参加してくれると思うんですよ。そういう意味ではすごくポジティブな変化かなと思います。

**高橋:**リアルエンタメの渴望感がめっちゃ高まったことは、未来に向けて良い状況かなと思っています。コロナ禍でZoom飲み会がすごく流行って、「もうZoomでいいじゃん」ってなりかけて。僕も職業柄、「これはまずいな」って気持ちと、「チャンスだな」って気持ちが半々でZoomで遊ぶゲームやおもちゃをガンガン

作ったんですよ。例えば、カードを出し合って遊ぶみたいなことをやって盛り上がったのですが、割とあつという間に「やっぱり会いたいね」ってみんなが言い出して。昨今、『鬼滅の刃』があれほどヒットしたのも、映画を観に行きたかったっていう気持ちが大きな要因だったと思うんです。おもちゃ業界の話で言うと、ミニ四駆やベイブレードなどのアナログゲームって、今まで何回も「もうおしまいだ」って言われてきた歴史があります。最初にニンテンドーDSが大ブレイクした時も「ボタンを押せば魔法が打てるのだから、もう子供たちはリアルなおもちゃの価値を分からなくなるよ」と何回も言ったんだけど、リアルホビーとゲームの価値はずっと上下して。どこかで必ずゲームの価値は落ちて、ソーシャルゲームの価値も落ちて、またベイブレードが復活するみたいなことを繰り返して。

まさに、リアルなおもちゃへの渴望感とか、それを目の当たりにした子供たちが熱狂するということが起きているわけです。だから、今後、大人も巻き込む時が必ず来ると思っているんですよ、会って遊びたいとか。僕たちは今ここからオンラインでのエンタメを考える



自分が好きなことを楽しむ!

のもアリかもしれないけど、就活で「もうITだな」とか、「正解はネットの世界だ」みたいなことを思わないで、やりたいことをやるのが良いと思うし、これからやるんだったらリアルエンタメかなって思っていますね。Zoomのライブ配信や有料配信、Zoom演劇なども、すごいノベーションだなと思います。その場所に行かなくてもゴロゴロしながらライブを見ることができて、しかも、キャバを気にしないでいってすごい変化だと思ったけど、結局はリアルなライブに立ち返って遊びの選択肢が増えただけだと思うから、遊びの世界においてもこの一大現象をポジティブに捉えていかもれないって思いますね。

**古田:** 高橋さんのご意見に近いんですけど、みんながまず、「オンラインでいろいろなことができるんだ!」と気づいたことが大変素晴らしいと思うんですよ。僕は、2015年11月にバズフィードに加わりましたが、グローバル企業でしょっちゅうNYとやり取りしないといけないんですね。だから、そのころからオンライン会議をやるようになって、GoogleドキュメントやGoogleスプレッドシートを東京・NYで同時に、一緒にエディットしながら会話を進められることを、本当にすごいなと思っていました。でも日本で会議をすると、そういうツールを使っている人がほとんどいないから、Wordを添付してやり取りが行ったり来たりになって…。「Googleを使えば、この3時間の作業が5分で終わるのに」と思いながらやっていたので、日本でもそういうことができるようになって本当に素晴らしいなって思うんですよ。それと同時に、「でも、やっぱりオンラインだとダメなものがあるよね」、「やっぱり直

接会って話したいよね」って改めて気づくじゃないですか。だから、一緒にいられる時間を大切にすると、久しぶりに会ったら「あー良かったねー」って話になるし。そういう温もりもさらに伝わるようになって。そういう面では本当に良かったんじゃないかと思います。

**常見:** ここで視聴者の方から質問がきています。先ほど河崎さんの「正解を探さないといけない時代から、正解のない時代になった…」というような発言に対して、「親や学校が正解を与えてきたのにいきなり自由にしていいですよ、というのは難しいのでは?」というご意見ですが、河崎さんいかがでしょうか?

**河崎:** 私が親や学校から正解を与えられて教育されてきたと言っていたのは、今の学生ではなく、もっと上の世代、私たちの世代のことですね。今二十歳前後くらいの子たちは課題や問題を解決する能力にフォーカスした教育を受けてきたから、まずは自分で問題自体を探してくる。それに対する考えも自分で考えるという教育を受けているはずだから、正解は与えられていません。私は「自由にしていいですよ」と言っているのではなく、この子たちが自立的に「正解というのは自分で決めるんだ」ということに気が付いたんだね、と指摘したわけです。ですから、「あなたたちに教えることは何もないから、自分で考えなさい」と突き放しているのとはちょっと違いますね。すべての金銭的サポートが公的なものである限り、借金を膨らましたり、先送りしたりすることに過ぎないのが政治の基本なので、金銭的に何かをするというより、私が若者にできるのは全肯定ですかね。それこそ「ロックダウン世代で、いいじゃん」ではないけど、それでいい

じゃない。だって、それしかないんだから。私の若い頃も同じで、阪神淡路大震災で神戸が全部崩れて「かわいそうね」と言う人もいたし、ボランティア活動やNPOの在り方が一気に加速するなどのいろいろなことがあったけれど、人と比べてもしょうがない。それしかないのだから、あるもので頑張るしかないんじゃないかと思う。だから、今のあなたたちの在り方でいいと思うし、「考えている」ということを上の世代として誇りに思う。具体的にあなたたちが必要とすることにサポートをしていきたいと思っています。

**常見:** 肯定してあげることも一つの答えですね。00年代に若者論、さらには若者劣化論が出て、「それは嘘だ」という反論もあり。やっぱりそれぞれの良さがあるし、とんでもなく新しいものが生まれるのではないかと思います。

**河崎:** 私が大学に入学したとき、その学校は創立4年目くらいでしたが、とても良かったのが、「とにかく面白いことだけはやろう」みたいな変人が集まっていた。そして、その中からいろいろな企業が生まれました。そんなガラガラボンな、何が出るか分からない雰囲気を与えても人は育たないと思う。だから、むしろ私はこのロックダウン世代が羨ましくて。みんな勉強なんかしないで、ゲームやり放題でも、音楽聞き放題でも、なんでもいい。そこから得た知見、自分が本当にそれが好きだと分かった感覚は超尊いですよ。

**常見:** ある意味、そこで結構前のめりになれて、「結構楽しめてるじゃん」、「劣っているわけじゃないじゃん」ということに気づくという。

# オンライン授業で孤独を感じる学生が増えた？

**佐々木:** コロナ禍の中ですが、特に孤独を感じてはなくて、むしろオンライン授業が分からないから友だちとLINE通話をしながら授業を受けています。

**常見:** なるほど、横でつながっているということね。

**佐々木:** 問題を共有できたことで、元から一緒にいた友達との仲が深まったと思う。

**常見:** じゃあ、「友達のいない学生はどうするんだらう？」とか、「やっぱりこれって、できる人を前提にして話してる？」みたいな話にもなると思いますが、彼らはどうすればいいんでしょうね？

**高橋:** ネット上の話でいうなら、「うろつくこと」を上手くなるのがこれからの時代で重要だと思っています。僕は外をうろついている人と会うタイプだったから、「どうしたらネットでうろついたらいいんだらう？」ということも最近、考えています。一つは発信。SNSをはじめとするツールでいろんなものを世に出す。記事でもなんでも。オンライン上でも「生きてますよ」という生体反応を見せるんです。すると、誰か一人でも気が付く。自分が作ったものを見て共感してくれる人は必ずいるはずなので、自分が好きな事を世の中に投げてみるのがすごくおすすめです。思わぬところで誰かが自分を見つけてくれて、出会って、Zoomでおしゃべりして、友達になれるかもしれないし、旅行するかもしれない。そういうことが起きるだろうと思います。あと、「寂しいよね」って言い合える寂しい友達がいればいいと思っ

ていて。「孤独だよ」って言い合える人がいればもう孤独じゃない。だから、「孤独だよ」って言ったらいいと思います。

**常見:** Twitterで、「春から〇〇大生」というハッシュタグをつけて、入学する前から繋がっていた、みたいなことがここ数年で起きていて、Twitterで在校生やOB・OGからアドバイスをもらうという繋がりがありますよね。運営スタッフの岩倉桃代が手をあげていますね。

**岩倉桃代:** 私もネットでのうろつき方が分からなくて。親から、「ケータイなどを使うときは個人情報に気を付けて」と言われたり、Instagramを始めるにも、「高校に入ってからじゃないとダメ」と言われて。自分を守ること、ネットで何かを始めなきゃという思いが両方あって、どうしたらいいんでしょうか？

**古田:** 発信元を書いていないメディアは見ないのが一番です。ネットで知り合うことは、常に危険性があると考えておくことが重要だと思います。

あと、孤独に関して言わせてもらいたいですけど、さきほど「学生だったら何をするか？」という議論で丸山眞男を紹介したじゃないですか。丸山眞男の『自己内対話』という本は、彼の日記を教え子たちがまとめた本ですけど、彼はその中で「国際交流よりも国内交流を」、「国内交流よりも人格内交流を」と言っています。どんなに他の人と交流したり、海外の人と交流しても、自分と対話をしないと考えは深まらないと言っているんですね。これと似たことを、ハンナ・アーレントというとても有名な哲学者も

言ってるんですけど、彼女は「孤独と孤立と孤絶がある」と言っていて、孤立というのは一人ぼっちで、孤絶というのはさらに社会から迫害されたような状況。でも、孤独、一人であるということは、自分と対話する時間を持つということだから、孤独は非常に豊かな時間なのである、と。僕も、授業の時間以外は図書館にこもっていて一人ぼっちだったわけですよ。寂しいけど、散々自分と対話したり、何百年前の本の著者と対話をしたので、今考えるとあの時間がすごく素晴らしかったし、一人でいても全然寂しくないんですよ。

**常見:** 確かに。自分と対話をしているかを問われると、大人たちも考えてしまいますよね。

**河崎:** こっち側にいるいかにも「リア充」っぽいペラペラ喋るこの人たちも、若い時代だけでなく今もいっぱい孤独な時間を持って、いっぱい自分と対話していると思いますよ(笑)。そうじゃなかったら、言葉が生まれてくるわけないんだから。だけど、それはそれとして、「自分は人前に立って不特定多数に向かって発信するんだ」ということを役割として背負っているだけ。やはり自分との対話がない人は、有効な言葉を持たないです。

**常見:** 質問が届きました。「現代の日本社会は、戦後の焼け野原の後に求められた豊かさに代わる社会共通の目標を失っているのではないか。今の日本社会はなにを目指しているのか」

**古田:** 戦後、都市部は本当に焼け野原になって320万人を失って、復興するしかなかったわけですよ。だからみんな、がむしやらになったわけですよ。そこから少しづつ復興が進み、高度成長期に入り、そこでもがむしやらに富を求めるしかなかった。実際の社会のインフラストラクチャーは欧米社会が長年積みあげてきたものとは差があって、だからバブルが崩壊した時に失われた30年が始まってしまったわけですよ。じゃあ、今の時代に国として、国家として何を指すんですか？僕は無いと思うんですよ。同時に、なんて素晴らしいんだと思うんですね。無いのだから、自分で見つければいいんですよ。当時はそんな暇すらなくて、「夢を考える暇があったら働け」という時代だったわけですよ。あなたにとってどちらが幸せな社会なんですか？と問われた時に、「目標を与えられた方が自分は頑張れる」という人もいるかもしれないけど、そうでないのであれば、自分で探せばいいじゃないですかって思いますね。



# 最後に、視聴者のみなさんに エールを！



**河崎:** あなたたちロックダウン世代を全肯定するというのが、私のふわっとした結論になったんですけども。私は、朝の番組でコメンテーターをしていますが、ちょうど今、米国大統領選の結果が出るタイミングだったのでデモクラシーや民主主義についてもう一度勉強しようと思って、昨日、本を読んでいました。それで素晴らしいと思ったのが、デモクラシーという言葉の原義（「デモ」＝民衆、「クラシー」＝支配で、民衆による支配）で考えるならば、いま民主主義が瓦解しているのは仕方がないことだと。なぜなら、民衆自体がかつての民衆ではなくなっているのだから。民衆は多様化し、細分化している。ニーズが変わっているこの時代に2大政党制でやっているあの国自体がアップデートできていないんだ、という話を書いてあって、確かにそうだなど。だから、価値観の多様化が当然認められているという部分では、あなたたち今の世代はむしろ幸せなんじゃないかな？25年前の私だったら、こんな感じの学生生活をしたかったんじゃないかな？と羨ましくも感じています。

**税所:** 僕が学生の頃はNPOを立ち上げる時に、クラウドファンディングとか先輩たちがお金を借してくれるとか、金銭以外のいろんなサポートを大人の世代から頂きました。だから、ロックダウン世代の人たちがやりたいことがあったら、それに関係する知り合いやクラウドファンディングのことが分かるので、ぜひ加勢したいですね。相談に乗りたいし、応援したいと思います。

**高橋:** 僕は人とコミュニケーションを取ってこなくて、大学に入って変わろうと思って2年間落語をやったけど、1回もウケなかった。すべり続けて2年、そして、3年目に自虐ネタをやったらちよつとウケて、「人を笑わせることが人生の全て」と思っておもちゃを作る仕事に就いたんです。でも、やりたいことを見つけたのって難しくて、人生のヒントは自分の弱点や悩み、コンプレックス、欠点にあると思ってるんですね。だから、それらを解決したいという気持ちで見つけていく方法もあるし、今の時代で大変なことがいっぱいあるのだとしたら、「自分たちでこうしたい!!」っていう気持ちで人生を切り拓くとも思う。そんなふうに悩みを味方につけていったらいいんじゃないかなと思います。

**古田:** 僕はロスト・ジェネレーション。でも、ロスジェネ世代って呼ばれることが本当に嫌いで、「俺は何も奪われてない」ってずっと思っているから、みなさんも「〇〇世代」と括られても「いや、なにも関係ねえし」っていうくら



いに強く生きてもらいたいと思います。

実はロスト・ジェネレーションって、僕らの世代じゃなくて元ネタがあるんですよ。欧米で使われた言葉で、第1次世界大戦時代に青春期を送った世代、20世紀初頭の1900年代の人たちをロスト・ジェネレーションって言うんですよ。代表的な作家にアーネスト・ヘミングウェイがありますが、彼の『誰がために鐘は鳴る』という小説はスペイン内戦をテーマにしたもので、その中に出てくる「世界は素晴らしい。戦う価値がある。」という一節がすごく好きなんです。学生の頃にそれを読んで、「よし、戦おう」と思って、ずっと戦っているつもりなんですけど。なので、世の中って汚いし、ムカつくことが多いんですけど、同時に素晴らしいし、だからこそ戦う価値があるのかなと思うので頑張ってください。

**佐々木:** 今日一番質問したかった内容は、「私たちロックダウン世代を一番苦しめている要因はなんですか？」だったのですが、今回のイベントを通して、河崎さんがおっしゃっていたように民衆の形は違っているし、古田さんがおっしゃっていたように昔の世代が今の世代と同じように扱ってはいけない、ということが分かりました。つまり、価値観の多様化が進んでいて、孤独は一見悲しいことに思えますが、今の孤独を利用して今の自分を見つめ直す時間なのだと。国際教養学部では海外と触れ合う機会があって、自分の国を紹介するという時に自分のことがまず紹介できないという課題があるんですね。その点で、私たちの学部と繋がる部分があったし、私たちを一番苦しめているのは私たち自身。考え方の違いなんだということが分かりました。

**常見:** ありがとうございます。僕からも一言いうなら、「楽しむことをさぼるな」と。あと、「青春を自粛するな」ということ。もつと言うと、「恥ずかしいことを恥ずかしがるな」ということですね。実は、最近、母親が膝の手術をして。介護をしなくてはならなくなりました。今は、地元の北海道もコロナ感染が拡大して面会に行けません。この時期に家も買って、すさまじい借金を背負ってるし、子どももまだまだ育てないといけないんですけど、今が最高に楽しいって言い切れるんですよ。「楽しむことをさぼらない」っていう姿勢が精神論に聞こえてしまうかもしれないけど大事だと思うし、一方でちゃんと弱みをさらけ出して、助けてもらうことも大事です。ありがとうございました。

# YELL



抄録 寄稿(常見陽平)

## 大学生は、自由であることをサボってはいけない

常見 陽平

千葉商科大学 国際教養学部  
准教授

ふと、学生時代のことを思い出した。1995年、大学3年生の頃に私は「朝まで生テレビ」の観覧に行った。昔も今も、同番組は会場に大学生を呼んでいる。

私の理解度が低かったのかもしれないが、噛み合わない議論、納得感のない主張に怒りがこみ上げてきた。観覧席の学生からの意見を聞くコーナーがあり、私は手をあげ発言した。大御所の論客、西部邁さんに噛み付いたのだ。約10分間、私と西部邁さんのバトルが放送された。仲裁に入ったのは、その後、番組やイベントで共演することになる社会学者宮台真司先生だった。その番組には、国際教養学部初代学部長の宮崎緑先生も出演していた。奇妙な縁である。

完全に「若気の至り」である。しかも、この「放送事故」のようなやり取りはYou Tubeに投稿されており、まさか四半世紀を過ぎたあとで見るとは思わなかった。ただ、言い訳するわけではないが、極めて大学生っぽい出来事ではなかったか。自由、可能性、多様性、これがキーワードだ。

通っていた大学の入学式で、当時の学長だった歴史学者の阿部謹也先生は「大学生は誰にでも会うことができる」と言った。実際、その通りだと思う。「大学生」である立場を利用すれば、誰にでも会えてしまう。どんな場所にも行くことができる。何か新しいムーブメントを起こすことだってで

きる。世界的に新型コロナウイルスショックが猛威をふるっているが、大学生であることを自肅してはいけないし、自由をサボってはいけない。

今回のイベントは、学生スタッフは直前の会場設営、リハーサルまで一切、対面で会うことがなかった。事前の打ち合わせはもちろん、登壇者への依頼、事前インタビューもすべてオンラインだ。スタッフたちは自肅も萎縮もせず、自由な発想で、精力的にイベントを準備した。今、大学生であることを楽しみきったのではないか。

登壇者の皆さんには感謝しかない。大変にお忙しい中に、時間をつくってくれたこともそうだが、徹頭徹尾、学生を子供扱いせず、真剣に向き合ってくれたことに感謝したい。

思えば、私が朝ナマでやらかした1995年は阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件の年だ。何かが終わるような、始まるようなそんな時代だった。悲しみと不安もあったが、何かが始まるような熱い想い、より包み隠さず言うならば、熱狂のようなものがあった。教え子たちからも、今までの学生にはない「熱」を感じる。それがよいかたちになったのが、このイベントではなかったか。

この熱が大学をこえて伝わり、何かを変えますように。コロナ禍の今だからこそ、大学生は自由であることをサボってはいけないのだ。

# STAFF

スタッフ



□ックダウン  
世代で、  
いいじゃん。

## 国際教養学部 トークイベント プロジェクト メンバー

### 1年生

●岩倉 桃代 ●岩澤 有那 ●大森 千聖 ●工藤 瑞稀

### 2年生

●佐々木 陽菜

### 3年生

●浅川 真由 ●荒 美沙紀 ●宇貫 和奏 ●大江 祐介  
●崎野 文太 ●中尾 駿斗

### 教員

●山田 武 教授 ●常見 陽平 准教授

**CUC** 千葉商科大学  
Chiba University of Commerce

〒272-8512 千葉県市川市国府台1丁目3番1号

国際教養学部

TEL 047-382-5205

Email office-gkb@cuc.ac.jp

国際教養部の最新情報はWebサイト・Facebookで配信中です

千葉商科大学  
国際教養学部 Webサイト

千葉商科大学  
国際教養学部 **facebook**

最新情報を  
チェック!



スマホで  
簡単アクセス!

